



『古今和歌六帖』出典未詳歌注积稿：第六帖(9)芹 ～青葛

著者	福田 智子
雑誌名	社会科学
巻	43
号	4
ページ	19-37
発行年	2014-02-28
権利	同志社大学人文科学研究所
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000013396

『古今和歌六帖』 出典未詳歌注積稿

—— 第六帖（9） 芹／＼青葛 ——

福田 智子

『古今和歌六帖』は、約四千五百首の歌を、二十五項目、五百十七題に分類した、我が国初の類題和歌集である。古来、兼明親王や源順が編者に想定されており、貞元・天元年間（九七六～九八二）頃の成立かと考えられている。作歌の手引き書を意図した歌集であるが、和歌のみならず、『源氏物語』をはじめとする物語などの文学作品にも、少なからぬ影響を与えたと見られる。収載歌には、『万葉集』『古今和歌集』『後撰和歌集』や私家集・歌合など、出典の明らかかな歌もある一方、現在では出典未詳と言わざるを得ない歌も多く、それらの歌数は、収載歌の約四分の一を占める。本稿では、それらの出典未詳歌のうち、第六帖の「芹」から「青葛」までの題に配されている歌、九首について注釈を施し、表現のあり方を考察する。なお、底本は、『新編国歌大観』の底本である書陵部蔵桂宮本を用い、江戸期の流布本である寛文九年（一六六九）版本を含めた九本の伝本を視野に入れた本文異同を示す。

出典の見出せなかつた歌について注釈を加えるものである。

本稿では八首を収めた。

二、歌番号は、『新編国歌大観』の通し番号を用い、歌題を（ ）を付して記す。

三、底本は、『新編国歌大観』と同じく、宮内庁書陵部蔵桂宮本とする。

四、本文は、歴史的仮名遣いに統一する。踊り字を解消して当該の文字に改め、底本の表記を（ ）に入れて傍記する。また、私見によって濁点を付す。さらに、送り仮名など、底本にない文字を補った場合には、本文の右に「・」を付す。ただし、漢字仮名の区別は底本のままとする。

五、校異は、漢字・仮名の表記の違いや仮名遣いの相違は示さず、語の異なりのみを示す。諸本とその略称は次のとおりである。

凡例

一、本稿は、『古今和歌六帖』所載の和歌について、考証の結果、

- 永青文庫蔵北岡文庫本 略称(永)
- 島原図書館蔵肥前嶋原松平文庫本 略称(松)
- 内閣文庫蔵和学講談所旧蔵本 略称(和)
- 内閣文庫蔵林羅山旧蔵本 略称(羅)
- 神宮文庫蔵林崎文庫旧蔵本 略称(林)
- 神宮文庫蔵宮崎文庫旧蔵本 略称(宮)
- 田林義信氏旧蔵本 略称(田)
- ノートルダム清心女子大学図書館蔵黒川本 略称(黒)
- 寛文九年版本 略称(寛)
- なお、諸本文は、主として国文学研究資料館所蔵のマイク
ロ・紙焼き資料に拠ったが、次の三本については個々の資料
に拠った。
- (永) 細川家永青文庫叢刊3『古今和譚六帖(下)』(汲古書院、
昭和五十八年一月) 所収の影印
- (松) 島原図書館蔵肥前嶋原松平文庫所蔵の原本および紙焼き
資料
- (寛) 架蔵本
- 六、他出には、『古今和歌六帖』からの引用と思われる歌につい
て、歌集の名称(『新編国歌大観』の目次に拠る)、巻数、部
立、歌番号、歌題、詞書、作者名、歌本文、左注を順に示す。
七、考察中の和歌の引用は、とくに断らない限り、『新編国歌大

観』に拠る。引用形式は、原則として、「和歌本文」(歌集名・
部立・歌番号・作者名・詞書)とする。『万葉集』の番号は、
新・旧の順で表記し、本文には適宜漢字を当てる。なお、必
要に応じて、歌集名に底本の名称を冠することもある。
八、巻末には、芹々青葛の歌(三八六一―三八九三番)の別出
歌一覧を付す。

注釈

三八六三(せり)

【本文】

ひとしれぬまに生ふてふふかぜりの我だにひかばねもみざら
めや

【校異】○ひとしれぬ一人にしれぬ(紀)人しれす(黒・寛) ○
ふかぜりの一ふる芹の(和)古せりの(黒) ○我たにひかは
われたにひるは(水) ○ねもみさらめやーねもみさためや(林)
【語釈】○ふかぜり 深く根を張っている芹。 ○我だにひかば
「ひかば」は、動詞「引く」の未然形に「ば」が付いた順接假定
条件。「引く」は、生えているものを抜き取る意と、人を誘う意
を掛ける。 ○ねもみさらめや「根」に「寝」を掛ける。「め
や」は推量を反語的に表す。

【通釈】

人目につかない沼に生えるという深芹は、せめて私だけでも引き抜くならば、根も見えないこともあるまい（人目につかないあなたは、せめて私だけでも誘うならば、共寝をしてみないこともあるまい）。

【他出】なし

【考察】

男性を遠ざけてひっそりと暮らす女性を深芹にたとえ、深く根を張る芹であっても、引き抜けば根を見ることもあるように、そんな女性でも自分が気を引けば共寝をすることもあろうという男性の歌である。

「ふかぜり」の勅撰集における初出は『拾遺集』である。物名部に、「くきもはもみな緑なるふかぜりはあらふねのみやしろく見ゆらん」（三八四・すけみ・あらふねのみやしろ）という歌が見出せる。「根」に着目することが多く、当該歌もその一例である。また、人目につかないという観点から、「かくれつつきくらにこそふかぜりのおふるそこぞとおもひやられるれ」（元良親王集・一四三・ある女、御ふみつかはずに、かくれて侍らずといはずれば、宮）と詠まれた歌もあり、当該歌に一脉通じるものがある。

「ねもみる」という表現は、「白浪のよるよる岸に立ちよりて

ねも見しものをすみよしの松」（後撰集・恋一・五九九・よみ人しらず・女のあはず侍りけるに）をはじめ、「年をへてたけもかはらぬひら松のあやしやいかでねもみてしかな」（兼盛集・八四・ひら松のありけるを見て）、「ほととぎすよぶかきこゑをあやめぐさまだねもみぬにきくよしもがな」（内裏歌合〈応和二年〉・六・右近命婦）、「とこなつのはなによりこそあやめぐさねも見ぬやどをたづねてもくれ」（輔尹集・四三・〈東三条院の御賀の屏風の歌たてまつれ、と人人にめしければ、その中にてたてまつる〉五月、まらうど、女のものいりやのつまに、なでしこさきたり）といった歌に見える。また、『古今六帖』にも他に、「いかさまに生ふるものぞと玉かづらいかでしのびにねもみてしかな」（古今六帖・第六・三八七八・たまかづら）（後出）、「つくまえにおふるみくりの水はやみまだねもみぬに人のこひしき」（古今六帖・第六・三九五四・みくり）という歌が挙げられる。いずれも、「根」に「寝」を掛けて用いられており、平安中期当時の常套的な表現であったことがわかる。

三八六四（せり）

【本文】

はる雨のふりはへてゆく人よりは我まづつまんやせがはのせり

【校異】○和歌本文―片仮名小書（永） ○やせかはのせり―か

セカハノセリ(永) やす川の芹(宮)

【語釈】○ふりはへて わざわざ。ことさらに。「振り延へて」の「振り」に「(春雨が)降り」を掛ける。○やせがは 京都市左京区八瀬を流れる川。高野川、埴川とも。大原の翠黛山すいだいから南に流れ、高野を過ぎ、糺河原で鴨川に入る。吉田東伍『大日本地名辞書』は、「八瀬」の項に当該歌を引用する。

【通釈】

春雨が降り、(もう芹が生えているかと) わざわざ出掛けて行く他の人よりは、私がまっ先に摘もう。八瀬川の芹を。

【他出】

『夫木和歌抄』巻第一、春部一、二二四番

題不知、六帖

読人不知

春雨のふりはへ行きて人よりは我先づつまん賀茂川のせり

『歌枕名寄』巻第一、賀茂篇、一〇三番

六帖

芹

春雨のふりはへ行きて人よりは我まづつまんかも河せり

【考察】

春雨が降ると、八瀬川の岸边には芹が生えてくる。待ち望んでいた春の到来を喜び、誰よりも先に芹を摘みたいという思いを詠んだ歌である。

「雨」と「ふりはへ(て)」との組み合わせは、それほど多くは

ないが、「雨もよにふりはへとはん人もなしなきにおとりていける身ぞうき」(円融院御集・四七・梅つぼの女御、きさいになりおくれ給て、なげかせたまふころ、雨のふるに)、「雨もよにいづちならんふりはへてきたりときかば哀ならまし」(和泉式部続集・二六三・雨のいといたうふりける夜、ものへいきけるみちにやとおもふ人のきたるに、なしとてあはで、つとめて)といった用例がある。

「せり」は、「我はあすはのみやつまむさはのせり水はこほりてくし見えねば」(拾遺集・異本歌(堀河具世筆本巻七、三八四の次)・一三五二・藤原輔相・あすはのみや)、「をやまだのなきのせりのうらわかみねたくも人につまねぬるかな」(千穎集・九五・雑十三首)、「春ふかみみぎはのせりもおひぬらしいまはものうしわかなつむ人」(宇津保物語・かすがまうで・一四八・大夫ちかずみ)といった歌に見えるように、「さはのせり」「なきのせり」「みぎはのせり」など、地名を冠して詠まれることはまずない。八瀬川、あるいは『夫木抄』『歌枕名寄』所載の当該歌本文である賀茂川の芹を詠んだ例も、『新編国歌大観』を検する限り、当該歌の他には管見に入らない。

「やせがは」は、『新編国歌大観』を検しても、江戸期の二例を除くと、「やせ川を瀬瀬の井せきにせきとめて水ひきかくるをののなはしろ」(夫木抄・巻五・一八七三・隆実法師・仁安三年(ママ))

二月無動寺歌合、苗代、判者俊頼、基俊)を見出すのみであり、いわゆる歌枕としてのイメージを獲得していたとは言い難い。

一方、賀茂川は、夙に『万葉集』に、「鴨川の後瀬静けく後も逢はむ妹には我は今ならずとも」(巻十一・二四三五・二四三二)と詠まれ、その後も、「かも河のみなそこすみててる月をゆきて見むとや夏ばらへする」(後撰集・夏・二二五・みな月ばらへしに河原にまかりいでて、月のあかきを見て)、「かも川のかもの河せのつり人にあらぬわが身もぬれまさりけり」(夫木抄・巻二十四・一〇九八三・延喜御製・かも川、山しろ 御集)、「かもがはのせにふすあゆのいをとりてねでこそあかせゆめにみえつや」(大和物語・第七十段・一〇一・同じ人(忠文の息子))という歌が見える。また、『古今六帖』の出典未詳歌にも、「ゆふだすきかけても人をたのまねどなみだはかもの川にこそたて」(古今六帖・第三・一五五九・かは)(古今六帖・第三・一五九一・かは・第三句「たのまねば」で重出)といった用例がある。さらに、「賀茂の川原」の例が、勅撰集においては『後撰集』から見え、「ちかはれしかもの河原に駒とめてしばし水かへ影をだに見む」(後撰集・雑二・一一二九・あつただの朝臣の母・河原にいでてはらへし侍りけるに、おほいまうちぎみもいであひて侍りければ)が指摘できる。また、私家集でも、『順集』に二例(一五・一八二番)、『好忠集』に三例(一七四・一八二・四九九番)。

ただし四九九番は順百首)など、平安中期においても用例は少くない。

以上の用例から推すと、後の『夫木抄』『歌枕名寄』が、当該歌本文を、八瀬川下流の「賀茂川」としているのは、より一般に知られる河川名に変えられた可能性があるだろう。ということは、翻って当該歌本文は、やはり本来は「八瀬川」だったか。『古今六帖』諸本には、当該箇所本文異同が存する(「校異」参照)が、これもやはり、「八瀬川」という本文の不安定さを物語るものであろう。

三八六九(たで)

【本文】

みな月のかはらにおもふやほたでのからしや人にあはぬこころは

【校異】○おもふーおもふ(末)(宮) 生る(黒) おふる(寛) ○やほたてー。ほたて(や) (和) やなたて(田)

【語釈】○みな月のかはら 陰曆六月の川原。晦日に夏越の祓を行う。 ○おもふ 感慨に耽る。ここで二句切れか。黒川本・寛文九年版本の本文「生る(おふる)」に拠れば、「みな月のかはらに生る」が「やほたで」を修飾することになり、意味も通りやすい。 ○やほたで 多くの穂の出た蓼。蓼は秋に細長い

花穂を伸ばす。○からし 蓼の葉が辛い意と、つらい、切ないの意を重ねる。

【通釈】

六月の川原で感慨に耽る。(そこに生える)八穂蓼の葉が辛いように、切ないなあ、あの人に逢わない時の気持ちは。

【他出】

『夫木和歌抄』巻第二十八、雑歌十、一三六〇三番

(蓼)

同(題しらず)、六帖

同(読しらず)

みな月のかはらにおふるあをたでのからしや人にあはぬ心は

【考察】

水無月祓に恋心を祓おうとやってきた賀茂の川原には、多くの穂を出した蓼が生えている。その蓼の葉が辛いことから、祓い切れずに味わっている、恋人に逢えないつらさを詠んだ歌である。

「やはたで」は、夙に『万葉集』に、「童ども草はな刈りそ八穂蓼を穂積の朝臣が腋草を刈れ」(万葉集・巻一六・三八六四・三八四二・或るは云ふ 平群朝臣の嗤ふ歌一首)と詠まれ、平安期においても、「やはたでもかはらをみればおいにけりからしやわれも年をつみつつ」(好忠集・一〇七・四月中)の他、『新

編私家集大成』所収冷泉家時雨亭文庫蔵素寂本順集にも、「にはみればやはたでおひてかれにけりからくしてだにさみがとはぬに」(二六八)といった用例が見出せる。『好忠集』『順集』の例は、いずれも形容詞「からし」とともに詠まれており、その点においては当該歌も同様である。「からし」という語は、「すまのうらにあまのこりつむもしほぎのからくもしたにこひわたるかな」(清正集・五八・ひとに)に見られるように、「藻塩木」についても用いられ、味覚の辛さと心情的なつらさを重ねて用いられることが多い。

「あはぬころ」という表現としては、「中中にいへどもしらぬ時よりもいまはときくにあはぬころよ」(村上天皇御集・三一・まゐり給はむとありけるほどのすぎければ、れいの内の御)という私家集の用例が挙げられる。

なお、『夫木抄』では、当該歌は本文が「あをたで」になっている。これは、『新編国歌大観』中、唯一の例である。

三八七四(むぐら)

【本文】

なにせんにたまのうてなも八重むぐらいつらんなかにふたりこそねめ

【校異】○いつらん―はへらん(松・和・羅・林・宮・田・黒・)

寛 ○なかに―なかにやとイ (田)

【語釈】○なにせんに「なにかはせん」の意で、一つのことか何の役にも立たないという判断を表す。○たまのうてな 玉で飾ったような美しい御殿。○八重むぐら 幾重にも生い茂った雑草。荒れた屋敷の象徴。○いづらん 動詞「出(いづ)る」の現在推量の助動詞「らむ」が付いたもの。底本・永青文庫本を除く諸本、および『夫木抄』や『伊勢物語』『源氏物語』の古注釈書引用和歌では、「はへらん(む)」に作る。

【通釈】

玉で飾ったような美しい御殿も、何にもならない。今頃、幾重にも雑草が生い茂っているであろう荒れた屋敷の中で、ふたりに寝よう。

【他出】

『夫木和歌抄』卷第三十六雑部十八、一七一三七番

むぐら、六一マ

読人不知

なにせんにたまのうてなもやへむぐらはへらんやどにふたりこそねめ

『伊勢物語集注』第三段、一九〇番 (伊勢物語古注釈書引用和歌より)

何せんに玉の台も八重葎はへらん宿にふたりこそねめ

『河海抄』夕顔、一一二三番 (源氏物語古注釈書引用和歌より)

なにせんに玉のうてなも八重むぐらはへらむ宿にふたりこそねめ

【考察】

立派な御殿も、恋人と一緒にでなければ無用である。共寝ができれば、荒れた家でも十分だという恋心を詠んだ歌である。「玉敷ける家も何せむ八重むぐら覆へる小屋も妹と居りてば」(万葉集・卷十一・二八二五・二八三六)の詠み換えと見られる。

「なにせんに」という句の勅撰集における初出は、『古今集』の「あふまでのかたみも我はなにせむに見ても心のなぐさまなくに」(恋四・七四四・読人しらず・題しらず)という歌である。当該句は第三句に置かれているが、その後の勅撰集においては、「なにせむに結びそめけんいはしろの松はひさしき物としるし」(拾遺集・恋二・七四二・よみ人しらず・あるをとこの、松をむすびてつかはしたりければ)とあるように、初句に用いられるようになる。私家集においても、まず初句に置かれると言ってよい。当該歌も、その大方の例に入る。

「たまのうてな」は、「わぎもこが玉のうてなにひとりゐていとどわさなにやまなかざらん」(海人手古良集・二・冬)、「いけちかくふるはつ雪の名残には玉のうてなぞあらたまりける」(元輔集・六八・冷泉院のおはしまし時、池のもののはつゆきといふ事を殿上の人人よみ侍りに、かはりて)、「けふみればた

まのうてなもなかりけりあやめのくさのいほりのみして(賀茂保憲女集・四九・なつ)といった私家集に見られる。また、『宇津保物語』にも「すみこしも見しもかなしき故郷を玉のうてなになさばなりなむ」(宇津保物語・楼のうへの上・九六六・大将(仲忠))とある。特に『海人手古良集』の例は、「たまのうてな」にひとりでいる恋人を詠んでおり、当該歌の「なにせんいたまのうてなも」の発想を生む状況として留意される。

「八重むぐら」の用例は、『古今集』に「今更にとふべき人もおもほえずやへむぐらしてかどさせりてへ」(雑下・九七五)と見えるのが勅撰集における初出である。だが、遡って『万葉集』に、「思ふ人來むと知りせば八重むぐら覆へる庭に玉敷かましを」(巻十一・二八二四・二八三五)と、その次に配される二八二五(二八三六)番歌(既出)の二首の歌があり、いずれも「玉敷く」という語がともに詠まれている。これらの万葉歌の「八重むぐら」と「玉敷く」「庭」や「家」との対比は、当該歌に一脈通じるものがある。なお、『万葉集』には他にも、「むぐら延ぶ賤しきやども大君のまさむと知らば玉敷かましを」(万葉集・巻十九・四二七〇・四二九四・右一首左大臣橘卿)という歌があり、先の二八二四番歌と類似する表現が指摘できよう。

「たまのうてな」と「(八重)むぐら」との組み合わせは、平安期に入り、「むぐらはふ下にも年はへぬる身の何かは玉のうてな

をもみむ」(竹取物語・一三・かぐや姫)や「かぎりなきたまのうてなのやへむぐらてるつきかげはちよのひかりか」(三条左大臣殿前裁歌合・一三・ありはらのひでき)に見られるが、用例はごく少ない。

三八七五(むぐら)

【本文】

むぐらおひてあれたるやどのこひしきにたまとつくれるやども
わすれぬ

【校異】なし

【語釈】○むぐら 単独で広い範囲に生い茂って草むらを作る草の類。いずれも茎や枝に刺がある。家にむぐらが生い茂ると、荒れて貧しいイメージがある。○たまとつくれるやど 美しく飾った家。「たま」は、球形あるいはそれに近い形の美しくて小さい石など、装飾品となるものを総称するという。ここでは美しさを比喩的に表現する。

【通釈】

(あなたと一緒に過ごした) 葎が生えて荒れた家が恋しいために、美しく飾った家のこともすっかり忘れてしまった。

【他出】なし

【考察】

葎の生える荒れた屋敷と玉で飾った御殿とを対比させ、美しい御殿ではなく荒れた家の方を慕うのは、そこで恋人と過ごしたからであるという。直前の三八七四番歌の内容を受け、その後には詠まれた歌であるような趣がある。

「あれたるやど」の例は、勅撰集に「をみなへしうしろめたくも見ゆるかなあれたるやどにひとりたてれば」(古今集・秋上・二三七・兼覧王・ものへまかりけるに、人の家にをみなへしうゑたりけるを見てよめる)、「人すまずあれたるやどをきて見れば今ぞこのはは錦おりける」(後撰集・冬・四五八・枇杷左大臣・すまぬ家にまできて、紅葉にかきていひつかはしける)、「いかでかの年ぎりもせぬたねもがなあれたるやどにうゑて見るべく」(後撰集・雑一・一一〇九・むすめの女御・三条右大臣身まかりてあくる年の春、大臣めしありとききて斎宮のみこにつかはしける)他の歌が見出せる。秋から冬のイメージがある。同様の例は私家集にも、「山里にあれたる宿をてらしつついくよへぬらん秋の月影」(小町集・一〇・山里にて、秋の月を)、「ひとすまずあれたるやどをきてみればいまぞこのはは錦おりける」(伊勢集・一・……このをとこのもとより、をとこのおやのいはは五条わたりなるに、きて、かきのもみちにかくかきついたり)、「君だにもあれたる宿にやどらずはよそにぞ見まし望月の駒」(順集・二四七・右馬頭遠頼朝臣、家にきたりやどれるころ、も

ちづきのおほんむま、いぬる秋ひかず、冬になりてひきたてまつる、むかふる日つかさの官人どもに、酒などたまふついでに)、「あとたえてあれたるやどの月見れば秋のとなりになりぞしにける」(恵慶集・一四八・みなづきばかり、かはらの院に、かれこれあつまりたり)などの平安中期の例がある。後世の勅撰集にも、同時代の作が採られることがあり、「ひとりふすあれたるやどの床のうへにあはれいくよのねざめしつらん」(新古今集・恋三・一二一七・安法法師女・題しらず)、「主もなく荒れたる宿をきてみれば雨も涙もとまらざりけり」(続後拾遺集・哀傷・一二五二・惟喬親王・題しらず)、「春雨にあれたるやどのひましげみとがむばかりの袖ぞぬれける」(新千載集・雑上・一六七六・源重之女・題しらず)といった歌があるが、季節感よりも人事面に着目されていると言えよう。なお、「夏之夜之霜哉降礼留砥 見左右丹 荒垂宿緒 照月影」(新撰万葉集・上・四五・夏歌廿一首)、「蓬生 荒留屋門丹 郭公鳥 佗敷左右丹 打蠅手鳴」(新撰万葉集・下・三三三・夏歌二十二首)、「つれづれとながめせしまに夏草はあれたるやどにしげくおひにける」(新撰和歌・卷二・一四七)、「夏の夜の霜やおけるとみるまでに荒れたる宿を照す月かげ」(寛平御時后宮歌合・五〇・右)などの用例は、夏の情景を詠んでいる。ただし、『重之女集』所載の百首歌では、「春の雨にあれたる宿のひましげみ

とがむばかりの袖ぞぬれける」(七・春廿)、「霰ふるあれたる宿
 にながめつつみやまのけしきおもひこそやれ」(五八・冬廿)の
 二首があり、春と冬に配されている。注目すべきは、前掲『恵
 慶集』一四八番歌に見える河原院における作で、他にも、「い
 にしへを思ひやりつつこひわたるあれたるやどのこけのいはば
 し」(恵慶集・一八三・ぬしなきやど)、「つきもりてあれたるや
 どのあかきにはいづれをあすのあくるにかせむ」(河原院歌合・
 一六・月影漏屋 右)がある。また、「一人ふすあれたるやどの
 とこのうらにあはれいくよのねざめなるらむ」(麗花集・恋上・
 八一・あすかむすめ・だいしらず)のように、独り寝とも結び
 つく。

「むぐらおひてあれたるやど」という表現は、『伊勢物語』に
 「葎生ひて荒れたる宿のうれたきはかりにも鬼のすだくなりけ
 り」(第五十八段・一〇五・男)という歌がある。荒れた宿のイ
 メージは、さらに「よもぎおひてあれたるやどをうぐひすの人
 くとなくやたれとかまたん」(大和物語・第百七十三段・二九一・
 女)、「よもぎふのあれたるやどのとほそよりとどふりいるあ
 めのあしおと」(千穎集・八五)など、「蓬生」という語を用い
 て表現されることもある。

三八七八(たまかづら)

【本文】

いかさまに生ふるものぞと玉かづらいかでのびにねもみてし
 かな

【校異】なし

【語釈】○いかさまに 状態、方法などについて疑問の意を表わす。どのように。どんなふうには。○たまかづら つたなどつる性の植物の美称。○いかで 理由、手段、方法などについて疑問、不定の意を表わす。どうして。何として。○しのびに 目立たないように。人目を避けて。○ねもみてしかな「ねもみる」という表現については、三八六三番(せり)参照。「ね」は「根」と「寝」との掛詞で、平安中期に散見される表現である。

【通釈】

どんなふうに見えるものかと思つて、玉蔓よ、なんとかして人目を忍んで根までも見たい(寝てもみたい)ものだなあ。

【他出】なし

【考察】

蔓のつるは、どのように生えているのか、根もなかなか見えない。当該歌は、そんな蔓を女性にたとえ、どんな女性なのか、共寝をして確かめてみたいものだという男性の立場から詠んだ歌である。

「後遂丹ノチツヒニ 何為与砥歟イカニセヨトカ 玉桂タマカヅラ 恋為留屋門丹コヒスルヤドニ 生増留藍オヒマサルアヲ」(新撰万葉集・下・四五二) という歌から知れるように、「玉かづら」は恋に悩む人の家に生い茂る。つるの形状が、恋の懊悩を象徴的に表している。当該歌では、「玉かづら」に喩えられた女性の心情を、その複雑さゆえに男性が推量しかねているのであろう。

三八八二(くず)

【本文】
かれかねてしもうつろふくずのはのうらみやせまし風につけ
つつ

【校異】なし

【語釈】○かれかねて 「枯れ」に「離れ」を掛ける。「かねて」は、……しようとしてもできないでの意。○うつろふ 色が褪せる。恋人の心変わりを暗示する。○くず マメ科のつる性多年草。○うらみやせまし 「裏見」に「恨み」を掛ける。「まし」は、疑問「や」と呼応して、実行を思い迷う意を表す。○風につけつつ 風が吹くたびにそれに応じて。「つく」は、ある物事に、他のことが付随する意。倒置法で第四句を修飾する。「つつ」は反復。「風」に、(恋人の男性の) 風聞の意を重ねるか。

【通釈】

枯れることもできないまま、霜にあたって色あせていく葛の葉が、風が吹くにつけては裏返って、葉の裏を見せるように、私は、あの人のことを諦めきれないまま、心変わりしていくあの人を恨もうかどうか、噂を聞くにつけては。

【他出】なし

【考察】

葛の葉が、枯れるわけでもなく、霜が降りて変色し、風が吹いて裏返るさまに、心変わりしてしまった相手を思い切ることできず、浮気な噂を聞くたびに恨んでみようかと逡巡する心情を重ねた歌であろう。恋人の男性を「くずのは」に喩えた、女性の立場からの作である。発想の根底には、「秋風の吹きうらがへすくずのはのうらみても猶うらめしきかな」(古今集・恋五・八二三・平貞文・題しらず) がある。

「うつろふ」「くず」の例は、『万葉集』にはないが、八代集において、「ちはやぶる神のいがきにはふくずも秋にはあへずうつろひにけり」(古今集・秋下・二六二・つらゆき・神のやしらのあたりをまかりける時にいがきのうちのみちちを見てよめる)、「うつろはでしししのだの森をみよかへりもぞする葛のうら風」(新古今集・雑下・一八二〇・和泉式部、みちさだにわすられて後、ほどなく、敦道親王かよふとききてつかはしける)の二例を数える。私家集では、平安中期までの例は、『新編国歌

『大観』に拠っても管見に入らない。

また、「くず」と「うらみ」の組み合せも、『万葉集』にはなく、勅撰集では、「秋風の吹きうらがへすくずのはのうらみても猶うらめしきかな」(古今集・恋五・八二三・平貞文)が初出である。八代集中では『新古今集』が最も多く、五首(四四〇・一〇九三・一二四三・一五六五・一八二二番)存する(このうち一八二二番の和泉式部歌は「うらみがほ」の例)。私家集においては、『新古今集』一二四三番にも採られた「くずの葉にあらぬ我が身もあき風の吹くにつけつうらみられけり」(村上天皇御集・八七・中宮まゐり給はざりければ・新古今集では結句「うらみつるかな」)の他、『元輔集』に三首(二〇四・二二〇・二五一番)、『好忠集』に二首(三二四〈毎月集〉・四五六番〈好忠百首〉)、『千穎集』に一首(七五番〈怨十首〉)など、日常詠とともに初期定数歌にも用いられている。

「うらみやせまし」という表現は、八代集に二例、いずれも『拾遺集』に見える。「近江なる打出のはまのうちいでつつ怨みやせまし人の心を」(恋五・九八二・よみ人しらす・題しらず)、「あらはれてうらみやせましかくれぬのみぎはによせしなみの心を」(雑一・八七三・小式部・六条前斎院にうたあはせあらむとしけるに、みぎにこころよせありとききて小弁がもとにつかはしける)である。前者は当該歌同様、第四句に置く。なお、

『万葉集』には用例がなく、私家集にも平安中期の例は見当たらない。

「風につけつつ」については、「月の入りてほどのへゆけば春のよのかぜにつけつつ花をおもふかな」(紀師匠曲水宴和歌・九・友則・月入花灘暗)の他、「こほりとく風につけつつ梅のはなゆく水にさへ匂ふなりけり」(順集・二二六・右兵衛督ただぎみの朝臣、あたらしく調ずる屏風のうた、正月、人の池水のしにも梅の花あり)といった用例も存するが、平安中期までの例は多くはない。これら二例はいずれも風は梅の香を運ぶものであるが、当該歌の内容は一線を画す。

三八八九(さねかづら)

【本文】

なき名のみたつたの山のさねかづらくる人ありと誰かいふらん

【校異】 なし

【語釈】 ○なき名 何の事実もない噂。 ○たつたの山 大和国の歌枕。「龍田」に「なき名が」立つ」を掛ける。 ○さねかづら 真葛。モクレン科の常緑蔓性低木。蔓であることから「繰る」と同音の「来る」を導く。

【通釈】

身に覚えのない噂だけが立ち、龍田山の真葛を手繰るように、訪

れてくる恋人がいると、いったい誰が言うのだろう。

【他出】

『歌枕名寄』巻第八、竜田篇、二四〇九番

六帖 五味

なき名のみたつたの山のさねかづらくる人ありとたれかい
ひけん

【考察】

通ってくる男性もいないのに、恋の噂を立てたのは誰なのかいふかかった歌である。「なき名立つ」から「龍田」を導き、「真葛」の縁語「繰る」に「来る（人）」を掛けるといった修辞でまとめられている。

「なき名」と「たつた」との組み合わせは、『万葉集』にはなく、勅撰集では、「あやなくてまだきなきなたつた河わたらでやまむ物ならなくに」（古今集・恋三・六二九・みはるのありすけ・題しらず）が初出である。「なき名のみたつたの山の」という表現も、「なき名のみたつたの山のふもとには世にもあらしの風もふかなん」（拾遺集・雑下・五六一・藤原為頼・廉義公家のかみゑに、たびびとのぬす人にあひたるかたかける所）、「なき名のみたつたの山のをつづら又くる人も見えぬ所に」（拾遺集・恋一・六九九・よみ人しらず・題しらず）といった歌に見える。特に後者は、「あをつづら」「くる人」といった、当該歌と類似す

る語や同一の語句が用いられており、ひとつの表現類型が看取される。私家集では、『延喜御集』に、「おもほえずわれになき名のたつ田川ながるるみづをかへしてしかな」（二三・よしありときこしめす人を、あしく思ふ人のきこえさせうとむとて、あだなる名をなむたつ、と奏しけるを、かのをかしといふ人、いかでかききけむ、もてはなれたるひとして、きこえごちける）、「たつた川なげのもみちもあるものをなき名をしもはなどかながしし」（二四・うへ、御かへり）という贈答歌が存し、当時の貴族たちの日常詠にも用いられていたことが知られる。

「さねかづら」と「くる」との組み合わせは、「名にしおはば相坂山のさねかづら人にしられでくるよしもがな」（後撰集・恋二・七〇〇・三条右大臣・女につかはしける）をはじめ、「つれなきを思ひしのぶのさねかづらはてはくるをも厭ふなりけり」（後撰集・恋三・七八七・よみ人しらず・女のもとにまかりたるに、はやかへりねとのみいひければ）、「あられふるみやまぐくれのさねかづらくる人見えておいにけるかな」（順集・九九・双六番のうた、これもありただがよみはじめたるに、よみつぐ）といった同時代の例を指摘することができる。

なお、「たつた」と「さねかづら」とを同時に詠んだ例は、『新編国歌大観』を検しても見出せない。そこに、当該歌の新発想を見出すべきか。

三八九三（青つづら）

【本文】

たえぬとはいひてしもの^(物)をあをつづら^(つ)またくりかへしやまびとのうさ

【校異】○いひてし物を—いひても物を（和）いひてもものを

（宮）○あをつづら—青つら（田）○やまびとのうさ—やまびとのうき（松・羅）山ひこのうさ（和・宮）山人のうき（田）
やま^{本のま}びとのうさ（黒）やま^本びとのうさ（寛）

【語釈】○たえぬ 青葛をすっかり刈り取り、根絶やしにした意。男女の仲が終わってしまった意を掛けるか。「たえぬとも何思ひけん涙河流れあふせも有りけるものを」（後撰集・恋五・九四九・内侍たひらけい子・左大臣河原にいであひて侍りければ）。○やまびと 山に住む人。山で働く人。「山」に「止ま（ず）」を響かせるか。

【通釈】

（根が）絶えたとは言っていたのに、青葛が再び繰り返して伸びてくる、（葛を刈る役目の）山人のつらさよ。それと同様に、（恋人との仲が）絶えたとは言っていたのに、再び恋を繰り返して止まないつらさよ。

【他出】

なし

【考察】

山で働く人にとって、刈っても刈っても生えてくる青葛は悩みの種であろう。これに、恋人との仲が途絶えても、また恋をしてしまう状況を重ねて詠んだ歌と見た。

「いひてしものを」という句は、『万葉集』から用例がある。当該歌と同様、第二句に位置する用例も、「思はじと言ひてしものをはねず色のうつろひ易き我が心かも」（巻四・六六〇・六五七）、「ま幸くと言ひてしものを白雲に立ちたなびくと聞けば悲しも」（巻十七・三九八〇・三九五八）の二首が見出される。平安中期には、「ふるゆきはとけずやこほるさむければつまぎこるよといひてしものを」（一条撰政御集・七四・かへし、おなじ人）といった日常詠はあるが、用例はごく少ない。

「あをつづら」は、『古今集』に「山がつかきはにはへるあをつづら人はくれどもことづてもなし」（恋四・七四二・寵・題しらす）という例が見え、また『拾遺集』に、「野を見れば春めきにけりあをつづらこにやくまましわかなくむべく」（物名・三九九・すけみ・こにやく）、「なき名のみたつたの山のををつづら又くる人も見えぬ所に」（恋二・六九九・よみ人しらす・題しらす）、「みかりするこまのつまづくあをつづら君こそ我はほだしなりけれ」（雑恋・一二六四・よみ人しらす・題しらす）という三首の歌が存する。また、私家集にも、「あをつづらいもを

たづぬとはるの日のかすみたちもちこひくらしつつ」(赤人集・一九二・かすみによす)、「くれどかくあはずなりなばあをつづらはひちるやどとなりもしねかし」(能宣集・三六五・時をかよひ侍る所にまかりたるに、いで侍らざりしかば、ひとりのみえ侍りしに、はひをちらしてかき侍りし)、「わざとこそくりはなつめれまがり木にはひまつはるるあをつづらこは」(惠慶集・八九・返し)、「あだなのみたつたのやまのあをつづらさすがにはたぞくる人もなき」(千穎集・九八・雑十三首) などがある。とくに『惠慶集』歌に、「おなじ人のもとに、あをつづらをこにくみて、なつめくりなどを、花にまぜて、やるとて」(八八番詞書)と記されるところから推すと、「あをつづら」は生活に根差した日用品であったことが窺えよう。だが、歌語としては、「こぬもくくるもくるしきあをつづらいかなるかたにおもひたえなん」(後拾遺集・恋二・六九三・読人不知・題不知)といった歌からも知れるように、「くる」「たゆ」といった語と組み合わせられて、恋の煩悶を表現する。

「あをつづら」と「くりかへし」との組み合わせは、現時点では先行例が見出せない。後世の例としても、「くりかへしいく秋かぜにそなれきているもかはらぬあをつづらかな」(秋篠月清集・二三八・草部十首)をかりうじて指摘できる程度である。

附記

本稿は、京都女子大学文学部における二〇一一年度の授業「講読中古A」「講読中古B」で扱った内容の一部である。受講生は、一首ずつ和歌の解釈を担当し、学期末レポートとして提出した。以下、担当者名と担当歌を示す。山本美月(三八六三番)・池田みゆき(三八六四番)・丸井しずか(三八六九番)・大寄汐(三八七五番)・大場夏子(三八八二番)・羽田野順子(三八八九番)・杉本千明(三八九三番)。

その後、「伝統文化形成に関する総合データベースの構築と平安朝文学の伝承と受容に関する研究」(同志社大学人文科学研究所第18期研究会(京都と文化)第17研究、および科学研究費助成事業基盤研究(C)課題番号25330403、いずれも平成二十五～二十七年)において、再度内容を検討した。

用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版Ver.2.2.2.2に、竹田正幸氏(九州大学大学院システム情報科学研究院)作成の文字列解析器「e-GSA Ver.200」を使用した。

最後に、資料を御提供くださった宮内庁書陵部・島原図書館島原松平文庫・国文学研究資料館に厚く御礼申し上げる。

〔附録〕

『古今和歌六帖』別出歌一覧―第六帖（9）芹く青葛―

凡例

1、『古今和歌六帖』本文と歌番号は、『新編国歌大観』に拠る。作者名・詞書・左注がある場合は、当該歌のあとに（ ）を付して記す。

2、調査対象として、『新編国歌大観』から以下の歌集を選択する。『古今和歌六帖』の成立は十世紀後半と想定されるが、出典としては、やや後世の作品まで調査範囲を設定している。

第一卷 1 古今和歌集く 4 後拾遺和歌集

第二卷 1 万葉集く 6 和漢朗詠集

第三卷 1 人丸集く 81 赤染衛門集

第五卷 1 民部卿家歌合く 61 源大納言家歌合長久二年、253 紀

師匠曲水宴和歌く 269 九品和歌、281 歌経標式（真本）く

285 新撰髓脳 290 新撰和歌髓脳、347 古事記く 353 風土記、

371 日本霊異記、372 三宝絵、389 土左日記く 393 和泉式部

日記、414 竹取物語く 420 落窪物語

第六卷 2 秋萩集く 5 麗花集

第七卷 1 奈良帝御集く 36 肥後集

3、別出歌は、『新編国歌大観』の巻数―通し番号を付した歌集名と歌番号で示す。

〔例〕 3―19 貫之 355 『新編国歌大観』第三卷 19 番目の『貫之集』 355 番歌

4、別出本文に異同のある場合は、句ごとに「」を付して記す。なお、漢字と仮名など、表記上の相違は指摘せず、有意の異同のみに限る。

5、『古今和歌六帖』所収歌には、別の歌集の歌との間で、さまざまな類似性を有するものがある。そのまま別出歌とは認めにくいものの、まったく無関係に作られたとも考えにくい場合には、（参考）と記し、波線を付す。

6、特定の別出歌が指摘できない場合や、十一世紀以降の作品にしか別出が見出せない場合は、いわゆる出典未詳歌として（未詳）と記し、傍線を付す。

別出歌一覧

せり

3861 あかねさすひるはただにてぬばたまのよるのいとまにつめるせりこれ（左大臣たちばなのもろえ）

2―1 万葉 4479 「ひるはたたびて」かへし

3862 ますらをとおもへるものをたちはきてかきはのたみにせりぞつみける（命婦）

2―1 万葉 4480 「かにはのたみに」

3863 ひとしれぬぬまに生ふてふふかせりの我だにひかばねもみざらめや

（未詳）

3864 はる雨のふりはへてゆく人よりは我まづつまんやせがはのせり

- 3870 3869 3868 3867 3866 3865
- むぐらはふいやしきやどもおほ君のこむとしりせばたましかま
むぐら
- 3876 たまかづら
- 3869 は 〔未詳〕
みな月のかはらにおもふやほたでのからしや人にあはぬころ
- 3868 たん 我がやどのほたでふるともとりうゑしみちなるまでに君をしま
たで
- 3867 きけん 2-1万葉 3434 「うゑこなぎ」「たねもとめけむ」
- 3875 〔参考〕 2-1万葉 2836 「たましける」「いへもなにせむ」「やへむぐら」「おほへるをやも」「いもとをりてば」
むぐらおひてあれたるやどのこひしきにたまとつくれるやども
わすれぬ
- 3874 そねめ 〔未詳〕
なにせんにたまのうてなも八重むぐらいづらんなかにふたりこ
- 3873 まし(つらゆき) 3-19貫之 451 「草木ならまし」
- 3872 せず(つらゆき) 1-2後撰 140 「ふかければ」、3-19貫之 865 「ふかければ」
八重むぐらこころのうちにしげければ花みにゆかんいでたちも
- 3871 なるらん 2-1万葉 762 「いかならむ」「ときにかいもを」「きたなきやど
に」「いれいませてむ」
- 〔未詳〕
しを(左大臣もろえ)
2-1万葉 4294 「まさむとしらば」
なにしにかかしこきいもがむぐらふのけがしきやどにいりまさ
- 3866 なはしろのこなぎがはなをきぬにすりなるるまにこあぜかくか
なしき(するが丸)
- 3865 なぎ かすみたつかすがのさとにうゑしなきなつなりといひしえはさ
しにけり(おほとものなかまる)
2-1万葉 410 「はるかすみ」「かすがのさとの」「うゑこなぎ」
「なへなりといひし」「えはさしにけむ」
- 3867 かんつけのいかほのぬまにうゑしなきかくこひんとやたねもま
- 3868 2-1万葉 2769 「ほたでふる」「からつみおほし」「みになるまで
に」
- 3869 〔未詳〕

- 3883 風はやみみねのくずはのともすればあやかりやすき君がこころ
 〈未詳〉
- 3882 つかれかねてしもにうつろふくずのはのうらみやせまし風につけ
 つつ
 1-1 古今 262 「うつろひにけり」
- 3881 千はやぶる神のいがきにはふくずも秋にはあへず色づきにけり
 (つらゆき)
 1-2 後撰 605
- 3880 あしびきの山下しげくはふくずのたづねてこふる我としらずや
 (かねみ)
- 3879 秋風にふきかへさるるくずの葉のうらみてもなほうらめしきか
 くず
 な (さだふん)
 5-41 平中 77 「あきかぜの」 「うらふきかへす」、1-1 古今 823
 「秋風の」 「吹きうらがへす」
- 3878 いかさまに生ふるものぞと玉かづらいかでしのびにねもみてし
 かな
 3-19 貫之 543
 かな
 〈未詳〉
- 3877 かけておもふ人もなけれど夕さればおもかげたえぬ玉かづらか
 な (つらゆき)

- 3890 つれなきを思ひしのらのさねかづらははてはくるをもいとふべら
 なり
 1-2 後撰 787 「思ひしのぶの」 「厭ふなりけり」
- 3889 なき名のみたつたの山のさねかづらくる人ありと誰かいふらん
 〈未詳〉
- 3888 なにしおはばあふさか山のさねかづら人にしられでくるよしも
 がな
- 3887 玉くしげみまとのやまのさねかづらさねずはつひにありとてま
 たん (みまかりの内大臣)
 2-1 万葉 94 「みもろのやまの」 「さなかづら」 「ありかつまし
 じ」
- 3886 あしがらのはこねの山にはふくずのひかばよりこねしたなにせ
 ん
 2-1 万葉 3381 (或本歌) 「したなほなほに」
- 3885 をみなへし生ふるさはべのまくず原いつかもくりてわがきぬに
 きん
- 3884 我がやどのくずは日ごとに色づきぬきまさぬ君は何こころぞも
 1-3 拾遺集 1251 「人のこころか」

3891

青つづら

やまたかみたにべにはへるあをつづらたゆる時なくあふよしも
がな

3892

2-1万葉 2785 「たまかづら」「みむよしもがも」

やまがつかきほにはへるあをつづらたづねくれどもあふよし
もなし

3893

1-1古今 742 「人はくれども」「ことづてもなし」

たえぬとはいひてしものをあをつづらまたくりかへしやまびと
のうさ

〈未詳〉

